

笑顔のために



ソンラのお酒。竹のストローで飲む



ソンラの風景。山々に囲まれ自然が豊かな

協力のなかの青春

2016年11月からベトナムのソンラ省リハビリテーション病院で理学療法士としてリハビリを行っています。活動を始めて約4ヵ月が経ちましたが、少しずつ直接患者さんに治療を行いながら同僚と話し合いをし、同僚向けの勉強会を行っています。

ソンラ省は、首都ハノイから西に約320km離れたベトナム北部に位置し、バスで約8時間かかります。自然に囲まれた山岳地帯で、気候は一年を通じ約10℃から35℃程度。雪はほぼ降らないため、故郷の滋賀県からするとそれほど寒く感じません。ここでは、ベトナム人家族3人の家でホームステイをしています。

ソンラ省の朝は早く、6時前に起き7時半には活動開始です。お昼休みが2時間あり、一度家に帰り昼食を食べ、後はお昼寝タイム。夜は10時には寝るという健康的な生活を送っています。日本では馴染みがありませんが、時折、犬や猫、それ以外にも蛇やハリネズミの肉を食べることもあります。どんな料理でもおいしく食べられるのは、私がベトナムに馴染んで来たからでしょうか。またソンラ省には多くの少数民族がいて、食事や言語が違い、高床式の住居や、既婚女性は髪をお団子にまとめる慣習などがあります。まだ体験していませんが、少数民族の踊りや、Ruou Can(ジョウ・カン。壺の中に長い竹のストローを差し込み、複数の人とシェアしながら飲むお酒)の文化もあるそうで楽しみにしています。

ソンラ省で生活するためには、ベトナム

語を話さなければなりません。ベトナムの人々は話し好きで、会えば、どこの国の人？何歳？家族は何人？ご飯食べた？結婚しているの？などとあれやこれと質問をされ、慣れないベトナム語で返答が困る事もしばしばありますが、少しずつ自分の言いたいことや身の回りの物の単語が分かるようになってきました。もっとコミュニケーションがうまく取れるように、と今も勉強はかかせません。学生の頃を思い出し、自前の単語帳を必死で暗記し、音読を繰り返し、あとは家族や同僚との会話で実践の繰り返し。どんなことも努力が大切だと痛感する日々です。

日本と比べると、ベトナムではまだまだリハビリの専門性を持ったスタッフが少なく、知識・技術が十分ではありません。また、リハビリが必要な患者さんでも家族や経済的理由により、一度退院させられて、数ヵ月後に病院に戻って来るという現状もあります。このため、日本でならもう少し良くなる可能性のある患者さんでも、なかなか回復しないこともあり、切なく感じる事があります。

日本式のやり方をそのまま伝えればいいというものではなく、これからどのようにして同僚達の知識、技術のレベルアップを図るかを考えると、悩みは尽きません。例えば、日本であれば着替えやトイレへの移動、歩くりハビリなどは病院スタッフが行うことが多いですが、ベトナムでは、その役割を家族が担っています。そうすると同僚

への指導の他に、本人を含めた家族への指導も重要になります。また日本の場合、3・4年制の専門大学・大学を卒業して免許を持った理学療法士がリハビリを行います。ベトナムでは約3ヵ月の研修でリハビリ技師として病院で働く事が出来ます。同僚の多くはこのリハビリ技師で占められるため、知識・技術を伝える際は、彼らが理解しやすいように簡潔且つ、興味を持ってもらいやすい内容で行わないといけません。文化の違いや言葉の壁も相まって、時にはしんどくなることや辛くなることもあります。しかし、国は違えど患者さんや同僚は同じ人間です。リハビリを通じて、健康状態が改善されれば、患者さんは笑顔でありがとうと言ってくれますし、同僚達も困った時は私を助けてくれます。協力隊として派遣され、始めは何かを変えないといけないと強く思っていたのですが、最近では現地のやり方にあった新しいやり方を生み出すことが大切だ、と改めて考えるようになりました。自分自身の健康を気遣いながら、目の前の患者さん、そして現地の人々との関わりを大切にすることがベトナムへの貢献の第一歩と信じ、これからの活動を頑張ります。

北川大和(きたがわ やまと) 滋賀県出身。佛教大学を卒業後、京都の学研都市病院で4年間理学療法士として活動後、ベトナムへ。現在は、北西部山岳地域の省都にあるリハビリテーション専門病院において、患者への理学療法を実施するとともに、日々の訓練を通じて同僚スタッフの技術、知識の向上を目指す。

